



新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

田に水が入るこの季節、栢山は美しい水の都になる。「緑の広場」の小川に蛍がいるというので見に行った。せせらぎの中に点滅する蛍光にしばし時を忘れた。30年前には家の前でも見ることのできた蛍を、再び見ることのできる幸せ。また一つ増えた地域の宝を、大事に守っていきたい。酒匂川の鮎も解禁となり、にぎやかな初夏が始まった。企画展、新九郎寄席と、6月の新九郎は魅力満載。皆様のお越しをお待ちしています。

新九郎 6月の展覧会のご案内

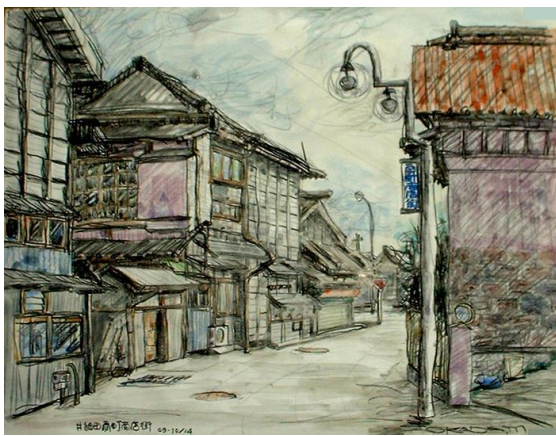
近隣・友の会会員の展覧会情報

会期 展覧会名	見どころ
 5/29(水)~6/3(月) 7-ルド ゴイナル 自分らしく生きる	障がいを持つ方たちの作品展 絵画・立体の展示とポストカード・ボールペン・一筆箋等
 6/5(水)~6/10(月) 渋谷武美彫刻 50 年 展	彫刻 50 年の歩みを 25 点の作品 で回顧する。西相美術協会副会 長。山形県生れ
 6/12(水)~24(月) 6/18(火)は休館 横井山泰展「射程」	130 号の大作と、小品 (肖像) 100 点を飾る。喜怒哀楽の人間 の顔に交じり動物も登場する
 6/15(土) 第 9 回新九郎寄席	立川志らら、笑福亭瓶二 午後 2 時半開場 3 時開演 入場料 1500 円前売券発売中!
 6/21(金) 新九郎デッサン会	どなたでもお気軽にどうぞ! 18:15-20:45 会費 1500 円 コスチューム、固定ポーズ
 6/26(水)~7/1(月) 籐を編む	モロ・ラタン・アートスクール の作品展、手提げ籠、くず籠、 鉢カバー、フクロウ等の動物も

会期・展覧会名	会場
7/11(木)~7/14(日) こみね展 (相洋高校美術部)	アオキ画廊 1.2F 0465-22-0825
6/19(水)~6/22(土) 第 10 回虹のかけはし展	アオキ画廊 2F 0465-23-5624
6/5(水)~6/10(月) 秋山芳江ガラスアート展	お堀端画廊 0465-23-7819
6/28(金)~6/30(日) 高木邸、庭と灯りとやきもの展	高木邸 (南足柄市塚原) 090-2424-7207
6/18(火)~6/23(日) 青の風景 若井理恵展	丹沢美術館 0463-83-9550
6/1(火)~6/23(日)6/17 休館 梅花美月展 虚空を見つめるⅢ	すどう美術館 0465-36-0740
6/25(火)~7/7(日)月曜休館 若き画家たちからのメッセージ展	すどう美術館 0465-36-0740
6/15(水)~7/8(金) ART NOW 2013	松永記念館、小田原文学 館、清閑亭 0465-22-2834
6/9(日)~6/16(日) 第 3 回大磯 湘 絵画展	大磯町立図書館 2F 0463-61-5655
6/8(土)~6/16(日) 良寛さんこころの歌	あしがり郷 瀬戸屋敷 0465-84-0050
6/1(土)~6/30(日)水定休 藤原さくら展-Mondays-	NARAYA CAFÉ GALLERY 0460-82-1259

小田原街なみスケッチ

暮らし・営みが偲ばれる懐かしい街なみを訪ね歩くシリーズ 岡田昌康
 第 5 回「井細田扇町」



昭和の町並みが残ると言う扇町へ出掛けてみた。井細田(いさいだ)駅から東へ歩く。255号線を越えた先に延命水の湧く延命地蔵が在る。町の有志が守っていて、この辺りが昔から続いた商店街だと言

う。脇道に入ると人通りはなく、静かである。木造の家々が並ぶ。右側の石造りの工場の門の前の、街燈の標識には、紺色の「扇町商店街」の文字。向い側は、二階建て三階建ての木造の家々。トタン板やビニール板が色とりどりに打付けてある。大きな屋外空調機が、軒下や、地上の羽目板に取り付けられている。鮮やかな朱色の看板を掲げた角の商店には、シャッターが降りて

いる。この町並みが今後も保存されてゆく年数を数えてみながら、スケッチに描き留めた。

思うことなど 横井山 泰



5月になり栢山の自宅近くの水路は水位が上がり田圃にも水が引き込まれた。町のあちこちでキレイな水が音を立てて流れる風景というのはそうそう無いように思う。昼間の松並木が田圃に映れば、もう一つの世界

が現れる。街燈もない帰り道には、どこまでも続く水面に月が映っている。本が読めるくらいの強い光を掌にかざすと手相がくっきり見え、暑くもなく寒くもない河原に出れば光はさらに強くなる。付近には近年稀なものがあることをジュエリーデザイナーの吉本繁くんから聞いた。さて、新九郎の個展まで2週間を切った。大作は完成、100点のシリーズも揃ったのでアトリエでシュミレーションを行った。100点の小品を基盤の目に並べるのは気の遠くなる作業である。半ばで疲れ果てていると、元大工の大家さんがやって来て便利な方法を教えてくれた。「バカ棒」棒に目印をつけるだけなのだが驚異的なスピードで進む。やはり人の知恵はすばらしい。並べ終わると物足りない部分が見えてくるので手直しし直し。昨年好評だった陶も鈴木隆さんとのコラボで出品する予定である。画像は DM 作品「射程」M50号である、千代で観た獅子舞(村人2人が山にいる獅子を殺す相談をしているが、逆に食べられてしまう。注文の多い料理店のよう)が基になっている作品「赤い人物はシカを追う人物を観て観ぬふりであるが良心に逆らっている。シカを射ようとしている人物は何時の間にかシカの射程に入ってしまうのかも知れない。」

車を降りるとプーンと磯の香りに包まれた。快晴の空と目の前には穏やかな海だ。紺のパンツに水色のシャツ、エプロンを付けた仕事着姿の方がにこやかに出迎えてくださった。アトリエでお目にかかった渋谷さんは、実に若々しく、アトリエが似合う方だった。海に面した高いアトリエの周りには、彫刻用の材木がきっちりとは置かれ、ここで制作されていることが分かった。数年前の台風で波に直撃され、海側の窓から潮が入って作品もずいぶん被害を被ったという。海側の壁面はご自身で補修されたという新しい板が張られ、その被害の大きさが想像できた。



アトリエには作品が丁寧に保管されていた。石膏、テラコッタ、木彫、FRP（強化プラスチック）。実物大の母子像から近作の小品まで、丁寧に棚に並ぶ作品からは、今までの幅広い仕事が見て取れた。今は、背中に羽根を付け足を挙げたかわいい少女像を制作中だった。作業机には良く使いこまれた多くの彫刻刀と粘土で作られた少女像が置かれ、中央には制作中の木彫の少女像があった。粘土は下書きだと言われた。直しができない木彫は、一度粘土で作ること途中の修正ができる利点があり、この方法で最近制作しているのだそうだ。一本の木から生まれてくる美しい形は、こうしたコツコツとした仕事の中から生まれていることを間近で見ることが出来たことは新鮮だった。

渋谷さんは輝かしい経歴をお持ち

だ。日展では特選を重ねた後、審査員、会員、評議員を勤められた。また神奈川県展の実行委員や審査委員も歴任され、現在西相美術協会の副会長ほか市展審査員など地域の美術を支える重鎮である。温厚で静かな語り口は、作品そのものように穏やかで安心感があった。しかし、作家で食べていくことは大変だったと振り返る。

渋谷さんは山形のご出身だ。集団就職で川崎の自動車関連会社に勤務した。しかし、ここでこの仕事が「自分の道」ではないと気付いたのだという。昔から絵を描くことが好きだった渋谷さんは、大学の準備をしながら当時川崎に住むお兄様の紹介で、毎週のように圓鑿（えんつば）勝三氏の下デッサンを学び、上野やデパートの展覧会に足を運んだ。そして1963年書生として圓鑿（えんつば）勝三氏に師事をした。そして4年後、日展に初入選を果たした。人が1年でやれることでも、2年、3年かかってもいいという気持ちで焦りも人をうらやむこともなくじっくりやろうと取り組んできたという。その後、音楽をなさる奥様とのご縁で奥様の実家のあった小田原に移り住む。長男誕生のその日に、日展特選の知らせを受け、二重の喜びを味わったことを今も忘れてはいない。この道で生きる厳しい選択を支え共に歩んでこられた奥様は、特選の『母子像』のモデルでもあった。

子供の誕生を機に、子供をモデルにした作品を追究した。人体、具象、動物、頼まれて仏像や肖像、馬なども制作したという。しかし彫刻の需要は少なく常に厳しい生活の中で、周りの人達に助けられて続けることが出来たと感謝している。1980年から90年代の15年間は、兄弟子でもありその後イタリアで学んで帰国された重岡建治氏の助手として、野外の大きなモニュメントづくりなどに関わって、子供たちを育て上げた振り返る。

朝から晩まで制作していたころに

比べ、気力が続かなくなってきたという今も研究は怠ってはいない。超リアルな「棚田康司」や写実的ではないが具象的な作品、ヨーロッパの写実の底にある精神性の感じられる作品が好きだという。渋谷さんの作品は、母子像、立像から、詩情ある帽子や少女像など「感動」やその「存在感」が見事に表現されている。習作から発展していくような作品を良しとせず、常に新しい表現にチャレンジされる姿は今も健在だ。

最近体力の衰えを痛感するという。いまは健康の為にも1日1万歩と畑仕事に汗を流すことが楽しいという。アトリエでは、制作の合間に好きな音楽を聴いたり読書をして過ごす。お子様たちが自立した今の生活を奥様とともに楽しんでいるようだ。ご自宅に案内いただき、今年初の新茶を頂戴した。奥様愛用のピアノと彫刻の置かれた部屋は、居心地がよく、お話は広がった。新ホールへの期待や、地方作家の作品展示の意味、地域には地域の空気の感じられる作品をと長い作家生活をされてきたからこそ感じる生の声を伺うこともできた。この道しかない一心にやってきた今、「仕事」＝「自分のやること」であった確信を持つという。一心に歩んだ彫刻家『渋谷武美』の足跡を確かめる展覧会は、5日よりギャラリー新九郎にて開催される。

(新九郎友の会 木下和子)



五月のひと

水彩画 みづゑの魅力・明治から現代まで（平塚市美術館）を観覧した。水彩画は幕末1862（文久2）年、イギリスのチャールズ・ワーグマンによって伝えられた。

日本の水彩画普及に大きな役割を果たした、大下藤次郎の作品が多くきていてその魅力を味わうに充分であった。大下が表した技法書「水彩画の葉」は16版を超えるベストセラーとなり、雑誌「みづゑ」の創刊により瞬く間に日本全土に水彩画ファンを拡げていった。大下藤次郎の水彩画は、明るい外光のもと空、大地、海が広く伸び伸びと描かれ、清新な風が吹き、来る日本の明るい未来をも感じさせるようだ。明治30年代の絵は明るく対象が簡潔に捉えられ、感動が素直に表れている。しかし40年に近づくにつれ、描写はより細かく対象の再現的要素が強くなり、みずみずしさが失せているように感じた。

村山槐多の風景はブルシヤンブルー、赤の激しいタツチの線描により揺れ、絵具が大地を溶かすように流れる。幼い少年、少女たちは無表情であるが、見るほどにいとしさが募ってくる。いづれも青春の激情がほとばしり、見る者の心を震わせる。萬鉄五郎、岸田劉生は何気ない風景を描いているが、画家の個性が出ていて印象に残る。小出楯重の胸長で滑らかな肌の裸婦は日本女性の魅力をよく表している。

さて現代である。宮本佳美S80号（Mitsumi Jōmei）の大画面に女性の顔をクローズアップで描いた絵は墨一色のモノクロームのようだが、いろんな色の絵具を薄く溶き何十回も重ねて描いている。そのスフマート（ぼかし）は精妙で近づいて目を凝らして見てもムラがない。微妙な陰影の変化は絶妙で画面に深みがあり、ダ・ヴィンチのモナ・リザを彷彿とさせる。竹中美幸の作品は水彩の他にパステル、墨、蠟、焦がし等様々な素材を重ねて制作している。美しい色彩のミトコンドリアのような大小の形態が漂い光がゆらめく。

明治期に水彩画が入ってから150年がたつ。初期の美しい風景画か、油絵の脇役のようなイメージであった水彩画であるが、最近また水彩という素材のもつ魅力を引き出すべく、新しい表現を試みる現代作家が多く出てきている。表現の多様性と進化を感じた。（参考・公式図録兼書籍「水彩画みづゑの魅力 明治から現代まで」展覧会は6月16日まで）